

## 編集後記

編集長(ダン シロウ)

第11号です。今号からの新執筆者は、浅田英輔さんと大川聡子さんです。前号では休載を余儀なくされた脇野さんも戻ってきました。そして、村本邦子さんの連載は10号で一区切りしました。又、新企画での登場を期待しています。

今号は200の大台を超えて、216頁になりました。第10号まで、執筆者の方々にお届けしていた印刷版も、一区切りとさせていただきます。この影響で、誌面に少し新たな展開もあります。

モノクロ印刷版を少数でも制作していると、印刷では出にくい色調は、タイトルなどでは避けておかなければなりません。そこが解禁です。

執筆者の方々も、カラフルな写真やイラストなども入れたいと思われたら、原稿とは別データでお送りください。編集させていただきます。

執筆者短信を読みながら、あらためて、それぞれの方達が対人援助領域の様々な場所で、良い仕事をしておられるなぁと思って感動しています。

私たちはいろんな理由で自分の今いる場所にたどり着いています。そして、そこで行うべき事を行って生きています。それでなければならなかった人もあるのでしょうか、大多数の人は巡り合わせでしょう。

私の場合、今いる場所も、果たしている役割もまったくその通りで、どこにも必然はありません。もし、二十歳の私に、未来を予想させたとしたら、妄想であっても、現在の私にかすりもしないでしょう。想像も出来ない事や場所を、目標に出来るはずがありません。

つまり今の私や、周囲にあるものは、何一つ目指して獲得したものではありません。

つまり、どこかから与えられた、文字通りの賜物(たまもの)です。だから、できる事がある間は精進しようと思います。

口ではいろんな事が言えますが、要するにどう行動するかです。それが分かっているので、ゴタゴタ言っていないで行きます。やり続けたことだけが満足をくれます。これに気づくのに、随分かかってしまいました。

編集会議と称する座談をこの時期にはいつもします。編集員・千葉晃央と新編集員・大谷多加志の三人で、宅配モノなどつまみながら仕事場D・A・Nでだべるのです。

今回は千葉編集員が、自分が担当する紙面のレイアウト・デザインを大幅に変更したいと提案しました。理由は、ちょっとゴチャゴチャしすぎていて、飽きるモノがあるといえます。

私はフムフムと聞いていました。そして彼の言うことはほぼ正しいと思いました。こういう作業はやっている内に、いろんな気がかりが出てくるものです。それがセンスだと思います。

初期に分担を決めてスタートした各連載は、いろんなレイアウト経過を持っています。

最初に我々がレイアウト・デザインしたままを維持しているモノ。執筆者が写真や表を多く入れた原稿を制作するようになったので、そのまま使うことになったモノ(これはタイトル文字デザインも変更になりました)。そして今回、千葉君担当のいくつかは、修正したいという希望で変更になります。しかし、いくつかは今のままが良いと思うので、そのまま残すことにしました。

私の担当しているモノにも、修正の余地ありだと考えているモノがあったので、少しですが手を入れました。

尋ねられると、並べているだけの編集のような言い方をしていますが、実際は試行錯誤を楽しんだり、残念がったりしています。そしてドンドン執筆陣は増えていっています。

三年間、無事務めた(何もしなかった)学会理事長から、無事、降りさせていただきま

した。これで、晴れて「対人援助学マガジン・編集長」一本です。本誌の充実のため、いっそう、頑張りたいと思います。どうぞよろしく。

対人援助学会 in 横須賀でのマガジンWS参加者は四名でした。全体の参加者が少ない大会だったので、それぞれのプログラムも小さくしつぽりと話し込みました。

そこで話題になったのが、どんどん厚くなるマガジンの執筆内容に関する、編集者の役割のことでした。これだけ多岐に渡る分野の執筆ですから、執筆内容について編集長が、網羅して点検するのは難しいと思っています。

投稿論文ではないので査読が入っているわけでもありません。全ては連載執筆者の責任において記述して貰っているわけです。引用、参考文献を明示した連載をしている方もありますが少数です。

どなたも連載であることで、書いたものへの読者の反応に対する責任が自動的に生じているとも考えています。引きつづき、更に拡大路線をいきます。そのような位置づけのマガジンとして、大いに皆さんの学びに、業務発展にご活用下さい。

#### 編集員(チバ アキオ)

浜松の NPO 法人クリエイティブサポートレッツ主催の「ドキュメント展 佐藤は見た！！！！！！」という展覧会にいった。障害領域の事業所を運営しているレッツさんは、福祉事業所だけでなく、地域に働きかけていく場(たけし文化センター)も複数展開し、とてもエネルギーである。今回の展覧会名の「佐藤」とは職員の名前です。つまり展示されているものは職員が現場で見ているものを展示というかたちで社会に伝える試みです。利用者が真っ黒に塗ってしまったミッキーマウスあり、ビニールテープでぐるぐる巻きにしてしまった人形あり、注射として嫌がるドライバーがあり…。その「もの」とそのエピソードを絵や文を交えて展示されていました。また、映像としてとらえた日常の実践場面、いつも施設で聞いている利用者の方の

話す物語を音で展示したのもありました。

これらのことは福祉現場では文書でまとめられてきたものです。しかも事業所内だけで。そこでは、課題として、やったことと文書とが違うという実践と文面との隔たり、文章能力が求められ、文章能力がある人がよき援助者とは限らない、文章ばかりに時間をとられる…などなど負の側面がたくさん指摘されてきました。

今回の「佐藤は見た！！！！！！」では今までとは違う何かを希求するスタンスを感じることができ、仕事のおもしろさも伝わってくるとても価値のあるものだと感じました。

現場ではスタッフ一人一人がハンディカメラを持っているそうです。先日、仙台の事業所もユニットごとにカメラを準備している話をききました。動画記録をして、年間報告時に保護者への取材なども加えた番組を作り職員で共有しているとのことでした。今あるやり方だけがその方法ではなく、違うものを模索し、探究していく姿勢はだいすきです。このマガジンもそうですから。

11号になり、新しくチャレンジをした執筆者の方々の姿勢も素敵です。(自画自賛！含む)

#### 編集員(オオタニタカシ)

第10号からの新人編集員です。マガジンを読んでまず感じるのは、切り口と視点の多様さ。日々自分が関わっている仕事は、ごく限られたフィールドだ。連載陣を見て、広大なフィールドを前にしばし立ちすくんだが、そんな世界につながってられることはきっと幸運なのだろうと思う。編集についてはド素人に何ができるのかとも思うが、不思議と不安はなく、何か自分にできる「めぐり合わせ」があるのだろうと、楽しみに待つ心持ちでいる。

編集会議2回目にして、何かがフィットし始めた感覚がある。連載を始めたきっかけは編集長に声をかけてもらったことだったが、書いてから気づいたのは、その内容が前々からどこかで言いたいと思っていたことばかりだということ。「書きたい人が、書きたいこと

を書く場」であるマガジンが、新しいステージのように思えて心が躍る。執筆者の方たちと、いつかどこかで会えることも、これからの楽しみの1つになった。

マガジンを通じて、どう「つながり」が広がっていくのかに期待しつつ、まずは自分の持ち場で力を尽くしておこうと思う。

## ご意見・ご感想

マガジンに対するご意見ご感想は

[danufufu@osk.3web.ne.jp](mailto:danufufu@osk.3web.ne.jp)

印刷版対人援助学マガジン(1号~10号)が少数ですが編集部にあります。ご希望の方はメールでお知らせください。在庫確認の上、メール便で発送します。

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町438  
ランプラス二条御幸町402 仕事場D・A・N

対人援助学マガジン

通巻11号

第三巻 第三号

2012年12月15日発行

<http://humanservices.jp/>

第十二号は2013年3月15日

発刊の予定です。

原稿締め切りは2月25日!

新規連載者も募っています。

執筆企画をお知らせ下さい。

## 対人援助学会事務局

〒603-5877 京都市北区等持院北町56-1  
立命館大学大学院応用人間科学研究科内  
TEL:075-465-8375 FAX:075-465-8364

対人援助学会事務担当

あなたも、ぜひ

学会にご加入下さい

どなたも参加できます

入会問い合わせ・退会・変更届

〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1  
リファレンス内

TEL/FAX 学会専用 :06-6910-0103

## 表紙の言葉

このイラストは、新聞連載用に書いていた文章のために描いたカットの一部分だ。

いつごろからだろう、絵と文の両方を引き受ける仕事が増えた。文章を依頼されて、「出来ればカットも一枚・・・」と打診されることが多い。

これが自分の執筆機会づくりには有利に働いていることに気づいたのは、大分たってからだった。

自分の文章を格別どうというモノだとは思っていない。出版の機会に恵まれているが、文章力をどうこう考えたことはあまりない。

ただ、掲載紙面のことを考えたとき、マガジンの編集長作業をしながら、画と文を上手くアレンジして紙面を仕上げてくれる執筆者は有り難いと思う。

だから、意図していたわけではないが、結果的に執筆機会が増えていたのだろう。

2012/12/15 団士郎